

博士學位論文

内容の要旨及び審査結果の要旨

平成 26 年度

京都外国語大学

はしがき

これは学位規程（平成 25 年文部科学省令第 5 号）第 8 条による公表を目的として、平成 27 年 3 月 15 日に本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を収録したものである。

氏名	任 川海
学位の種類	博士（言語文化学）
学位記番号	乙第2号
学位授与の日付	平成27年3月15日
学位授与の条件	本学学位規程第3条3号該当
学位論文題目	日本語と中国語における漢字同形異義語の意味的相違に関する研究—『日中辞書』『中日辞書』における辞書的解釈の問題点及び辞書編纂の諸問題をめぐって—
論文審査委員	主査 教授 彭 飛 副査 教授 宇城 由文 副査 教授 毛利 正守（皇學館大学） 副査 准教授 李 長波（同志社大学）

論文内容の要旨

本論文は漢字圏学習者向けの日本語教育の視点から、日本語と中国語における漢字同形異義語の意味的相違について考察したものである。特色の一つは漢字同形語の意味や用い方の考察を通して『日中辞書』『中日辞書』の辞書的解釈の問題点を浮き彫りにした。もう一つの特色は16視点を設けて、(1)比喩的表現、派生的用法(意味拡張)の有無による両言語の用い方の相違、(2)同じ表現でも指し示す範囲の異なりによる両言語の意味的相違、(3)人を表すかモノを表すかによる両言語の意味的相違、(4)人間と物事の両方に用いられるか否かによる両言語の意味的相違、(5)広く人間を指すのか、それとも特定の人間を指すのかによる相違、(6)人間の内的世界を表すのか、それとも人間の表情など外観を表すのかによる相違、(7)道徳、品格にかかわることを表す場合に用いられるか否かによる両言語の意味的相違、(8)プラス評価に用いられるかマイナス評価に用いられるかによる相違、(9)動詞、形容詞、名詞、副詞としての働きがあるか否かによる両言語の用い方の相違(動詞として用いられるのか、動詞を修飾できるのかなど)、(10)動詞として用いられるが対象となる目的語が異なることによる相違、(11)共起する語が同じか否かによる両言語の相違、(12)固有名詞、熟語として使われるか否かによる両言語の用い方の相違、(13)両言語の使用頻度の異なりや造語力の強弱による相違、(14)話し言葉なのか書き言葉なのかによる両言語の相違、(15)中国語・日本語それぞれにおける慣習的な表現の用い方の相違、(16)複合語があるか否かによる両言語の相違、について考察した点が挙げられる。

本論文は序章、終章を含め、八つの章から構成されている(1000字×513頁 400字詰め原稿用紙に換算して約1280枚になる)。

第1章では「第1パターン」(字形は同じだが、意味が多少異なる漢字語)における中国語と日本語の漢字同形語の意味的相違について考察した。「第1パターン」の下位分類として、「第1類」(中国語と日本語で意味領域が重なる部分があると同時にそれぞれ異なる部分も見られる場合)、「第2類」(日本語の方が中国語より意味幅が広い場合)、「第3類」(中国語の方が日本語より意味幅が広い場合)、「第4類」(日本語と中国語の意味はほぼ同じであるが、品詞や動作の主体などが異なる場合)の4つを設け、16視点から「清潔」「衛生」「接触」「緊張」を中心にその意味的相違について考察した。また日本語独特の

「接触事故」という表現、中国語独特の“接触群众”“接触接触”のような表現における日中辞書・中日辞書の解釈のありかたに関しても検討した。

第2章では、「人」を伴う表現(別人、他人、人種、達人、人気)及び「人」を表す表現(第三者)の意味的相違について考察した。「人種」の考察では(1)広く人間を指すのか、それとも特定の間を指すのかによる相違について考察し、日本語の「人種」は中国語の“人种”より意味領域が広く、中国語には見られない「夜型の人種」のような特定の間を指す独特の用法を持っており、中国語では“这类人”“这种人”などで対応する。一方、中国語では、“中国人种”“日本人种”“美国人种”などのように、【国名+人種】の形が使われるが、日本語にはない。また日本語の「人種主義」を“种族主义”、「人種差別」を“种族歧视”、「人種のるつぼ」を“种族大熔炉”というように中国語では“种族”で対応する場合もある、と指摘している。

第3章では「問題」「条件」「要求」「状況」「情況」「参加」「気色」を中心にその微妙な相違について考察した。「問題」の考察では「摆问题」(苦情を言う、文句を言う、仕事上のミスや失敗/問題点を挙げる)、“交代问题”(犯行を白状する)のように、中国語の“问题”には派生的用法が多く、いずれも日本語の「問題」には見られない用法で、日本語に訳す際は「欠陥」「おかしくなる」「病気になる、健康状態が悪化する」「ある事件に巻き込まれる」「逮捕される」「悪事がばれる」「結婚する」「揉め事」「不愉快なこと」「ポイント」「肝心な点」「重要な点」「かぎ」「質問」など「問題」以外の表現で対応することが多い。中国語の“问题”は日本語の「問題」よりも幅広く使われており、日本語に訳す場合、「問題」をカットするか他の言葉で対応することが多い。取りあげられる事柄<重大な問題でないこと、問題になっているわけではないこと>を表す場合、中国語では“关于……问题”のように、“问题”を使うが、日本語では「～について」「～の件について」「～のことについて」のように「問題」をカットして表現する。また「～の話」「～の議題」で対応する場合も見られる。“这件事没有问题”“吃饭不成问题”のように中国語の“没有/不成问题”は“大丈夫”「～心配はない」で対応することが多い、と指摘している。

第4章では、字形は同じだが、意味が相当(もしくは完全に)異なるパターン【第2パターン】の漢字同形語を中心に考察した。【第2パターン】における漢字同形語をさらに<第1類>と<第2類>に分類する。<第1類>とは、意味が重なる部分があるが、使われる場合や評価の善悪など意味や用法が相当異なる漢字同形語を指し、<第2類>は意味や用法が完全に異なる漢字同形語を指す。中国語と日本語における「帮助」「助長」「改正」は意味が重なる部分もあるが、使われる場面が異なり、評価の善悪なども完全に異にするため、意味や用法が相当異なる【第2パターン】<第1類>に属する。また、「人間」「正体」「深刻」「迷惑」は意味や用法が完全に異なり、【第2パターン】<第2類>に属する。第1節では、日本語の「帮助」「助長」と中国語の“帮助”“助长”を中心に考察した。「マイナス評価・プラス評価の相違」について、日本語の「帮助」はマイナスイメージをもつ事柄を表し、特に法律関係の文脈によく用いられるが、中国語の“帮助”はプラス評価の語として使われる。一方、日本語の「助長」はプラスイメージだけでなく、マイナスイメージの事柄やニュートラルの場合にも用いられる。が、中国語の“助长”は、マイナスイメージをもつ事柄を述べる場合にしか用いられない。日本語の「助長」の意味幅が広いいため、対応する中国語訳として“促进”“促使”“促成”“引发”“煽动”“推动”なども多く見られる。日本語の「帮助犯」「帮助罪」という表現は中国語には見られない。中国語に訳すと、“协从犯”“协从罪”となる。中国語の“帮助”は【帮助+名詞】の構文でよく用いられるが、その名詞には

“別人”“群众”“大家”など、人を表す語がよく現れる。日本語においても【名詞+を+幫助する】という構文が使われるが、その名詞には「逃亡」「殺害」「自殺」「死亡」「脱税」「飲酒運転」「犯罪」「侵害」など違法行為を表す語がよく使われ、「人を表す名詞」が少ない、といった相違点が見られると指摘している。

第5章では、中国語と日本語における漢字形態素「化」「素」「横」を伴う日中漢字同形語の意味的相違に関して、また一部の日本語的な表現の中国語訳の特徴に関して三つの節に分けて考察した。「横行」の考察において中国語の“横行”と日本語の「横行」は、主体が悪い人間や悪い人間からなる組織や団体などの場合、人々に悪影響を及ぼす物の場合、社会全体に悪い影響を及ぼす行動や社会現象などの場合に使われる点においては共通している。しかし中国語の“横行”は主体が自然災害や人間を害する動物などにも用いられるのに対し、日本語の「横行」はそのような場合に使われない。

第6章では、漢字圏学習者向けの日本語教育の視点から、日本語と中国語の漢字同形語の意味的相違(児童、厨房、散歩など11例)、日本語の漢字類義語(運命と命運、苦勞と労苦など)の中国語訳について考察した。

口述試問及び審査結果

口述試問の際、主査・副査から様々な見地から質問されたが、論文提出者は資料に立脚し、長年の研究の蓄積を遺憾なく発揮され、ほぼ的確な回答を示され、かつ興味深い議論も展開される結果となった。

「中国語の“化”の役割は日本語の『化』と同じなのか」「『審判』と『裁判』は中国語に訳すとなぜ“裁判”“審判”と逆さまになるのか」「『～的』の場合はどう扱えばよいのか」「『信用』と『故郷』など字音のみの訓みと字音と和語の訓みを兼ね備えたるものとのかかわり」「例文の選択の方法」などの質問もあった。さらに「終章に横断的な論がほしい」「中国語・日本語ともに歴史的な視点も今後取り入れること」「史的考証につめの甘さが見られる」「論文中の例文の訳文の再吟味が必要」「基本資料〔例文〕の訳文に客観性を持たせる工夫」「日本語の語彙史的研究から同形異義語の原因を明らかにすべき」などの意見もあったが、今後の課題の研究の進捗が期待される。

以上のような課題を抱えているにもかかわらず、本論文は研究範疇が限定されているので、この研究が持つ有効性は正当に評価されるべきである。

本論文は論文提出者の30年近く、日本語教育現場で生まれた研究課題で、研究の新規性、オリジナル性が認められ、結論にいたる議論の展開が十分な論拠に支えられ、かつ論理的であると評価される。

①本論文で考察した日本語と中国語における漢字同形異義語109語は中国人学習者の最も間違いやすいものばかりである。漢字圏学習者向けの日本語教育において極めて重要である。個別課題の研究も、日本語と中国語の意味相違の対照研究に新たな視点を導入し、オリジナル性が強く、今後の日本語教育・中国語教育に貢献できるものである。氏は16視点を提案し、日本語と中国語における漢字同形異義語の対照研究に非常に有効である。

②本論文では『日中辞書』『中日辞書』の問題点を指摘しており、辞書編纂においても大きな意義をもつ。

③第5章「中国語と日本語における漢字形態素『化』『素』『横』を伴う漢字同形語の考察」は日本語

と中国語における語構成の違いが見事にあぶり出されている点も評価する。

ただし、本論文に問題点がないわけではない。16 視点の基準にやや客観性を欠く面、一部の漢字の考察にはやや脆弱な面も見られる。今後、史的考証などの研究が期待される。

が、これらの点は本論文の優れた価値を損なうものでは決してない。本研究は、日本語と中国語の「漢字同形異義語」の対照研究における研究の最前線でなされたものであり、研究テーマが絞り込まれており、研究の方法論が明確である。先行研究に関する調査も十分に行われ、その知見も踏まえている。情報収集と分析能力、オリジナル性が高く、考察も詳細で、理論構築もしっかりできており、高い評価に値するものであることに変わりはない。当該分野の学術研究の進展に貢献する、独創性を備えた研究である。本審査委員会は、全員一致で、申請者に対して博士（言語文化学）の学位に値するとの結論に達した。

以上